

蘭字研究の最前線

吉野亜湖

井手暢子

小二田誠二

これまで

井手暢子『蘭字』（1993）により、蘭字は外国商館と日本の浮世絵工房による国際的なグラフィックデザインとしての価値付けが行われた。蘭字研究はここから始まったと言える。

2015年に、静岡茶共同研究会（研究代表小二田誠二）とフェルケール博物館の共同企画展「蘭字と印刷」が開催され、図録所収の論稿で、静岡の印刷史の観点から蘭字の検討を行った（小二田誠二「静岡の印刷と蘭字」）。また、この企画展を機に、日本紅茶株式会社と富士製茶会社の戦後の蘭字が同博物館に寄贈され、これまで資料数の少なさから研究対象にならなかった戦後の蘭字についての研究も開始するに至った（吉野亜湖「茶業産業遺産としての輸出茶用ラベル「蘭字」の研究：戦後の展開について、新発見の資料から」）。

さらに、国内の資料に限られていた主な研究対象を、2016年より日本茶の主要輸出国であるアメリカと、茶産地国である台湾や中国の現地調査を始め、日本の資料との比較検討や茶業史としての観点からの研究を行っている（吉野亜湖「輸出茶ラベル「蘭字」が伝えた日本茶ブランド—初の海外調査から」）。



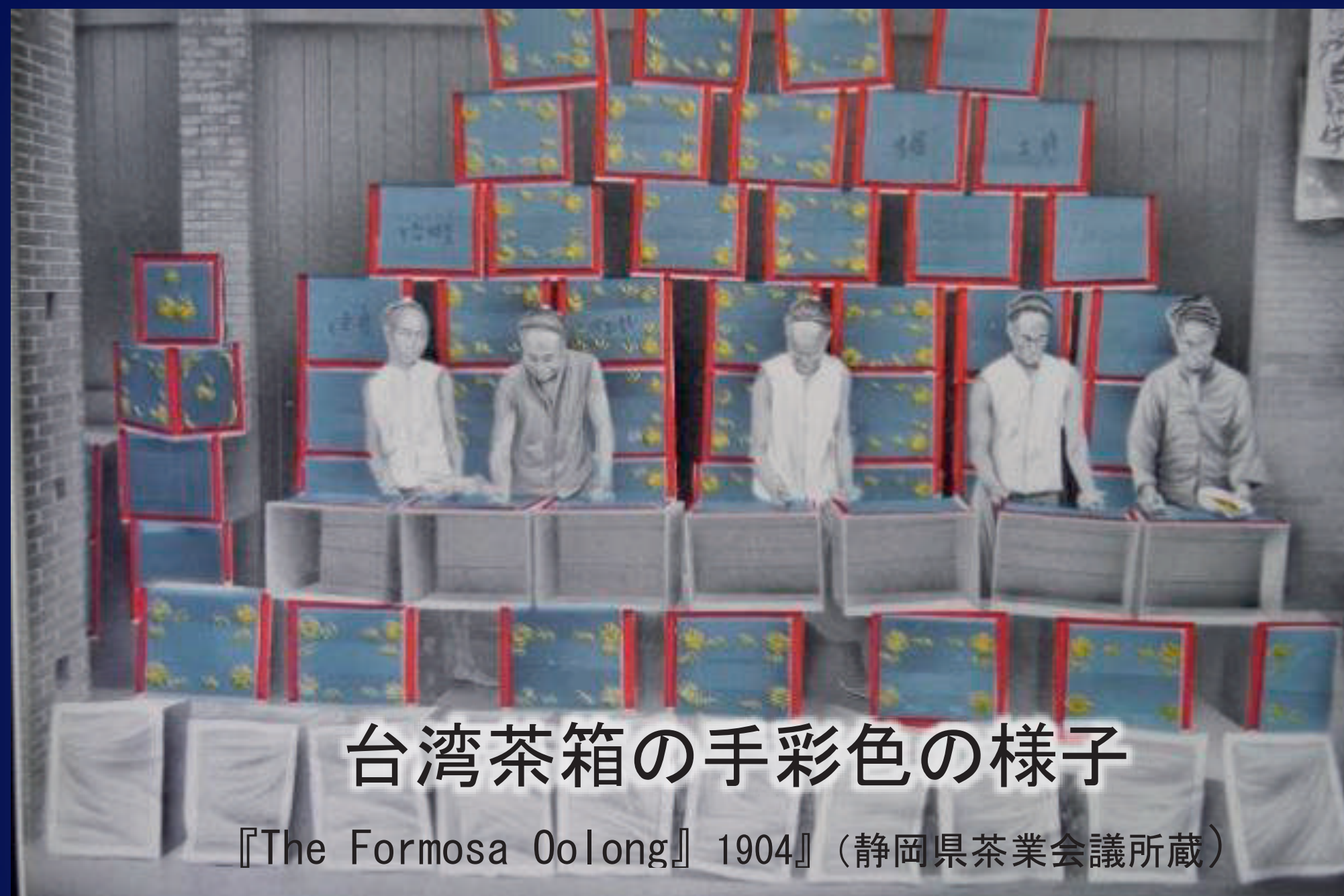
図：ハード商会の茶箱（フェルケール博物館蔵）作家・船・鉄道の情報もあり、製作から現地流通までの情報が読める資料である。日本に残された資料のみでなく、輸出先の資料と併せた研究を進めている。

これから

蘭字は、デザイン史だけでなく、文字情報も含まれているため、当時の製造法、茶業史や流通についても「読む」ことができる資料でもある。工房と浮世絵師や彫師・摺師など職人との関りも、今後の研究課題であろう。

『ふじのくに茶の都ミュージアム研究紀要・年報』第一号（2019）に、吉野により国内の蘭字所蔵館のリストと概要がまとめられた。この調査から静岡産業大学デジタルアーカイブ研究チームの協力でタッチパネルによる展示も公開されるに至り、今後の発展研究の可能性ができた。また、これまで公開に至らなかったアドミュージアム東京の資料を中心に、斎田記念館で企画展として紹介できることとなった（2020）。蘭字の企画展として都内では初の試みとなるため、茶産地以外での認識が広まる機会となるに違いない。東京など、主要茶産地以外でも明治期に茶栽培があった事実を蘭字が伝えていることも、この機会を通じて紹介していけたらと考えている。

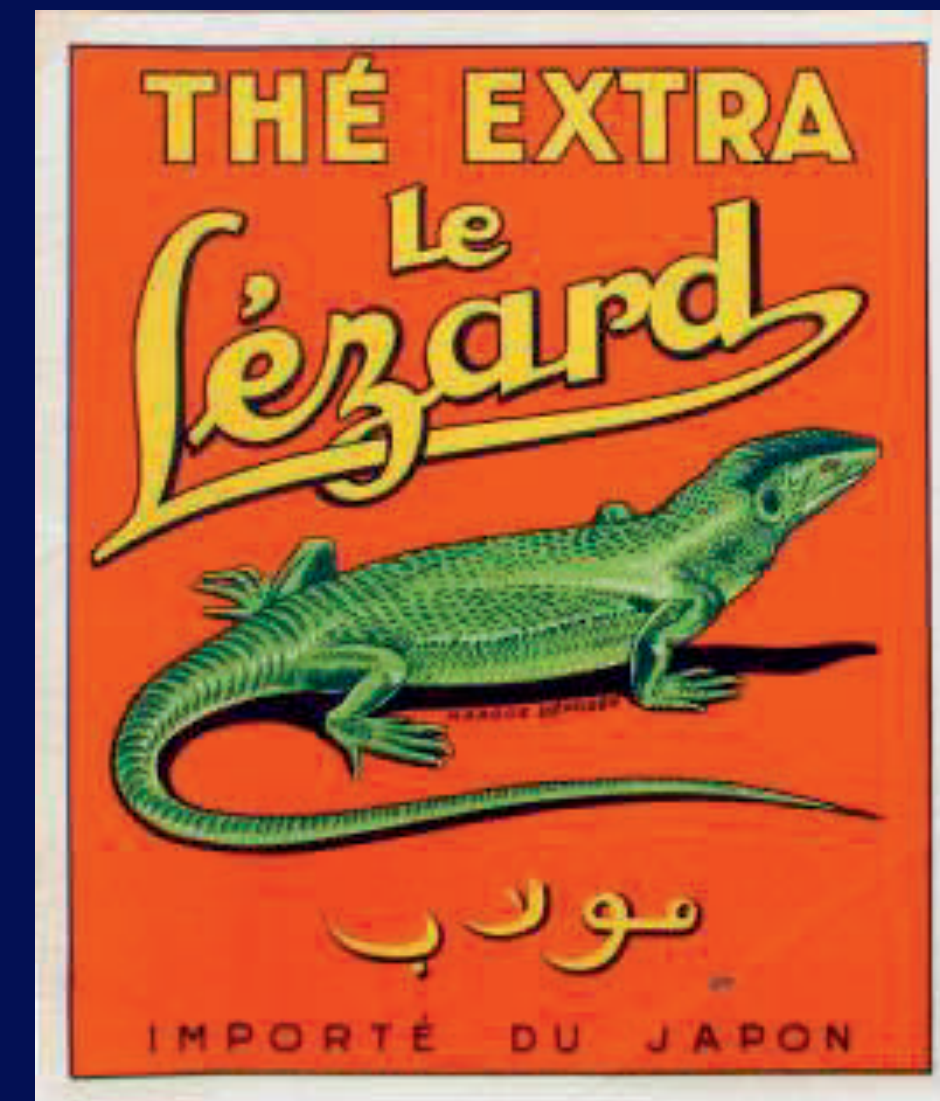
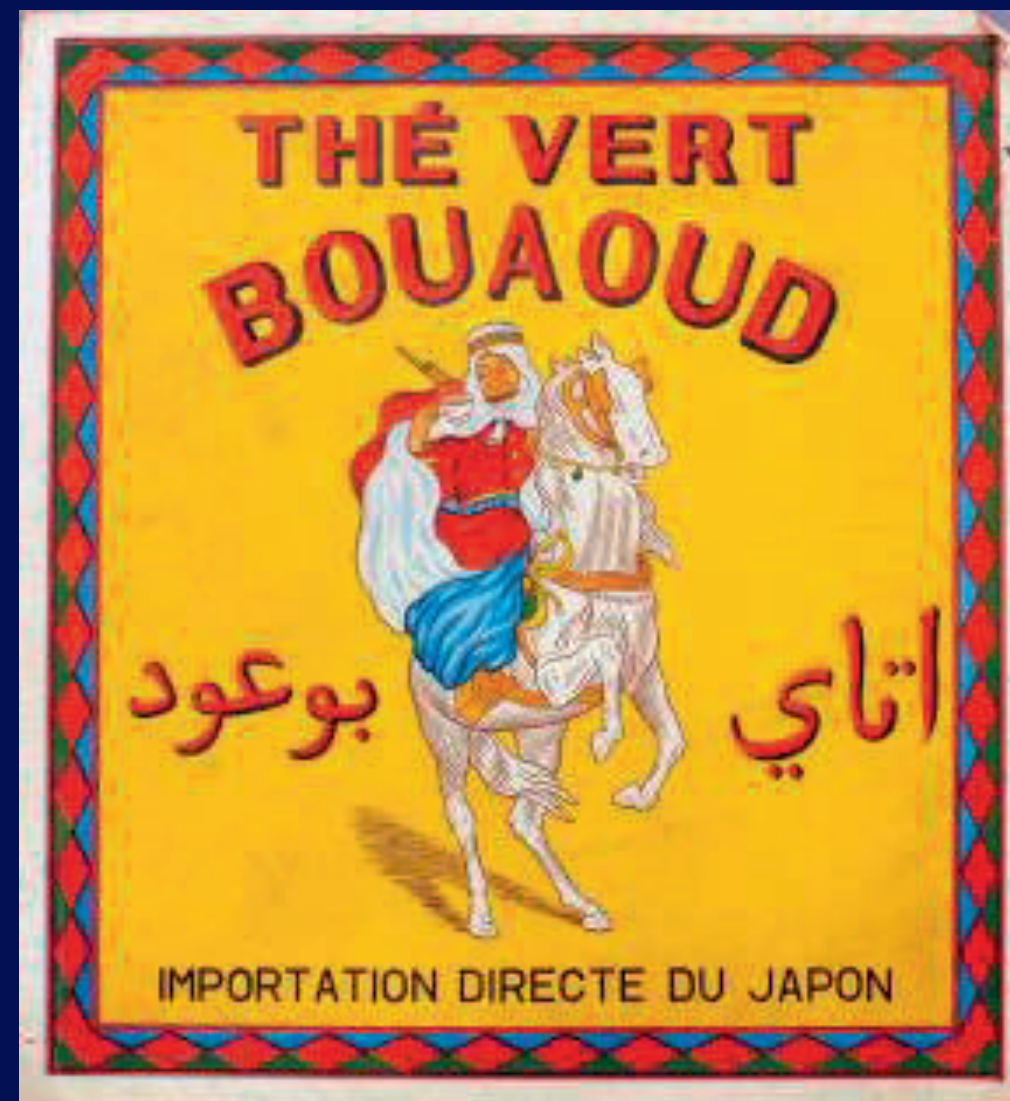
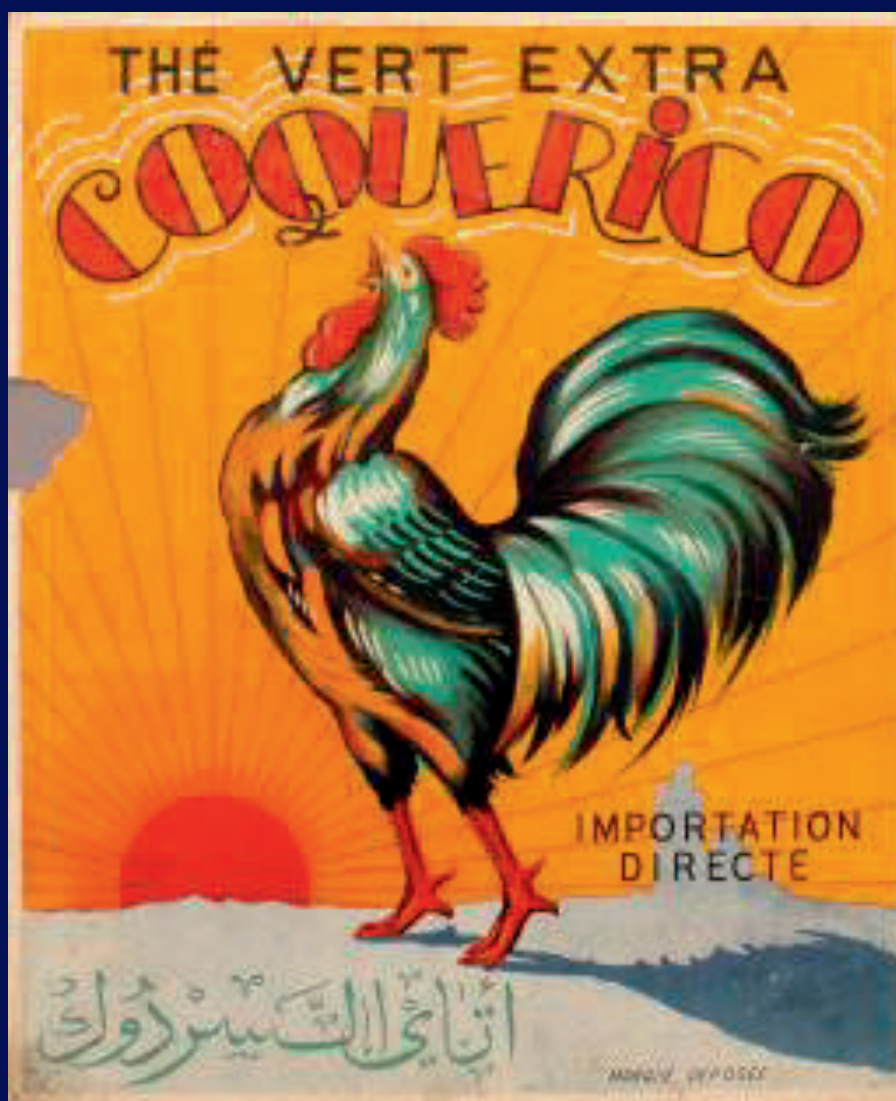
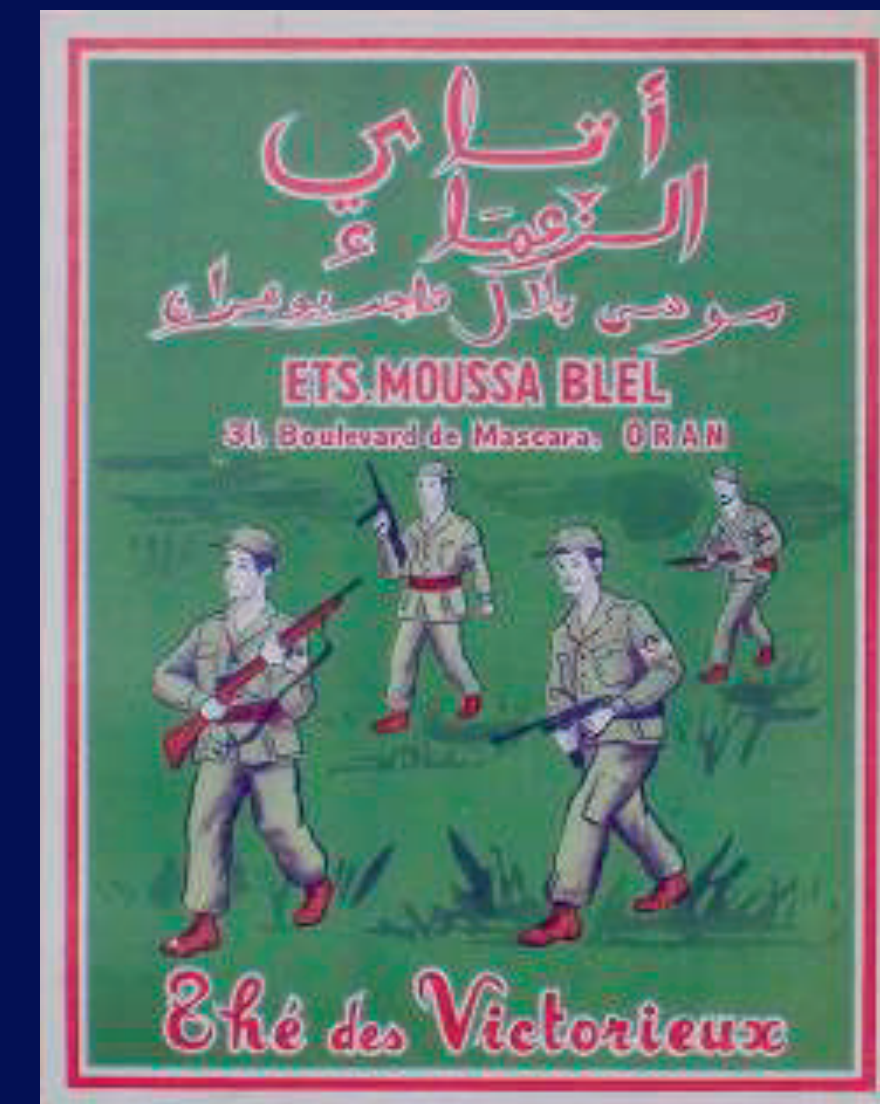
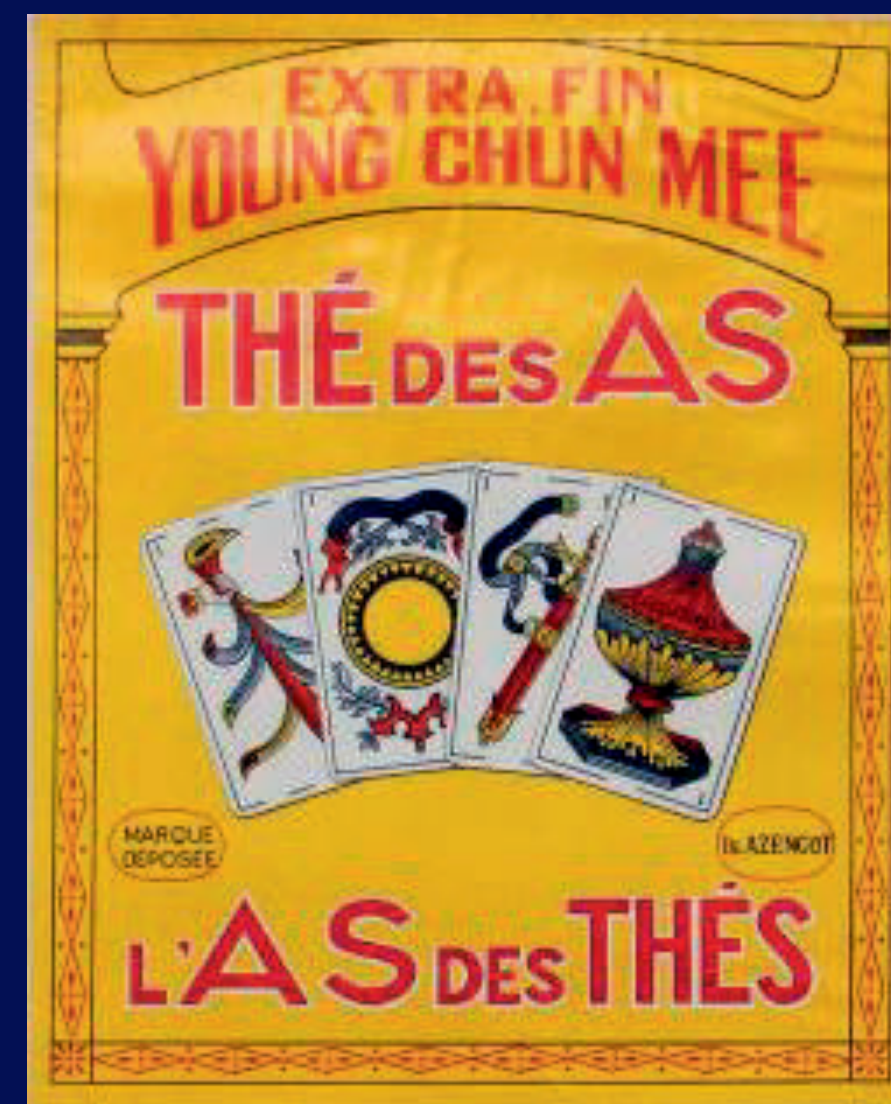
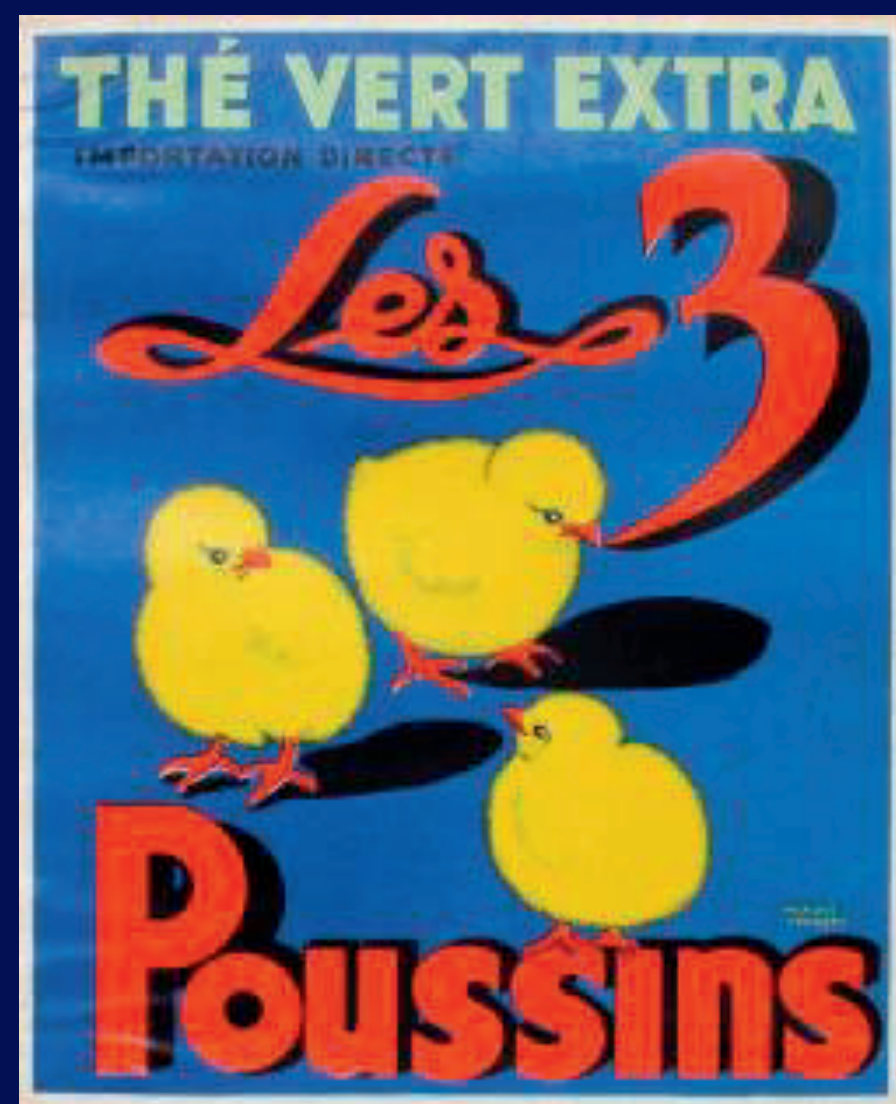




幕末・明治初期より、台湾や中国では彩色が手塗り作業であったのに対し、日本では浮世絵工房からの多色刷り印刷技術が活用されていた。今後も他産地との比較研究で、日本の蘭字の特徴がより明らかになっていくことが期待できる。

(Harvard Business School Library には同様に中国の手彩色の様子が見られる資料も残されている。)

北アフリカ向け 戦後の蘭字



富士製茶会社「蘭字登録」帳より(フェルケール博物館蔵)

1918(大正 7)年に第一次世界大戦終戦を迎えると、インド・セイロンからの優良かつ安価な紅茶がアメリカに安定して入るようになる。アメリカ市場での危機感を持った日本茶業界は、北アフリカ等の新市場開拓を目論んだ。第二次世界大戦後も戦前の下地が継続され、カサブランカに日本茶センターを開設するなど、北アフリカ輸出に力を注いだ。そのため、戦後の蘭字には、フランス領北アフリカに向けたフランス語や中東の文字が多く見られるようになる。北アフリカ市場では先行商品であった中国緑茶にブレンドすることが日本緑茶の主な役割であったため、特に「日本茶」であることを主張する必要がなくなり、蘭字に「JAPAN」という文字がほとんど見られなくなった。